

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 4月10日 10:34AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 46,000～57,600 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 43,560～49,200 ドル
(S&P500) 6175～6850

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 22,500～25,300
(ナスダック総合) 20,500～23,150

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

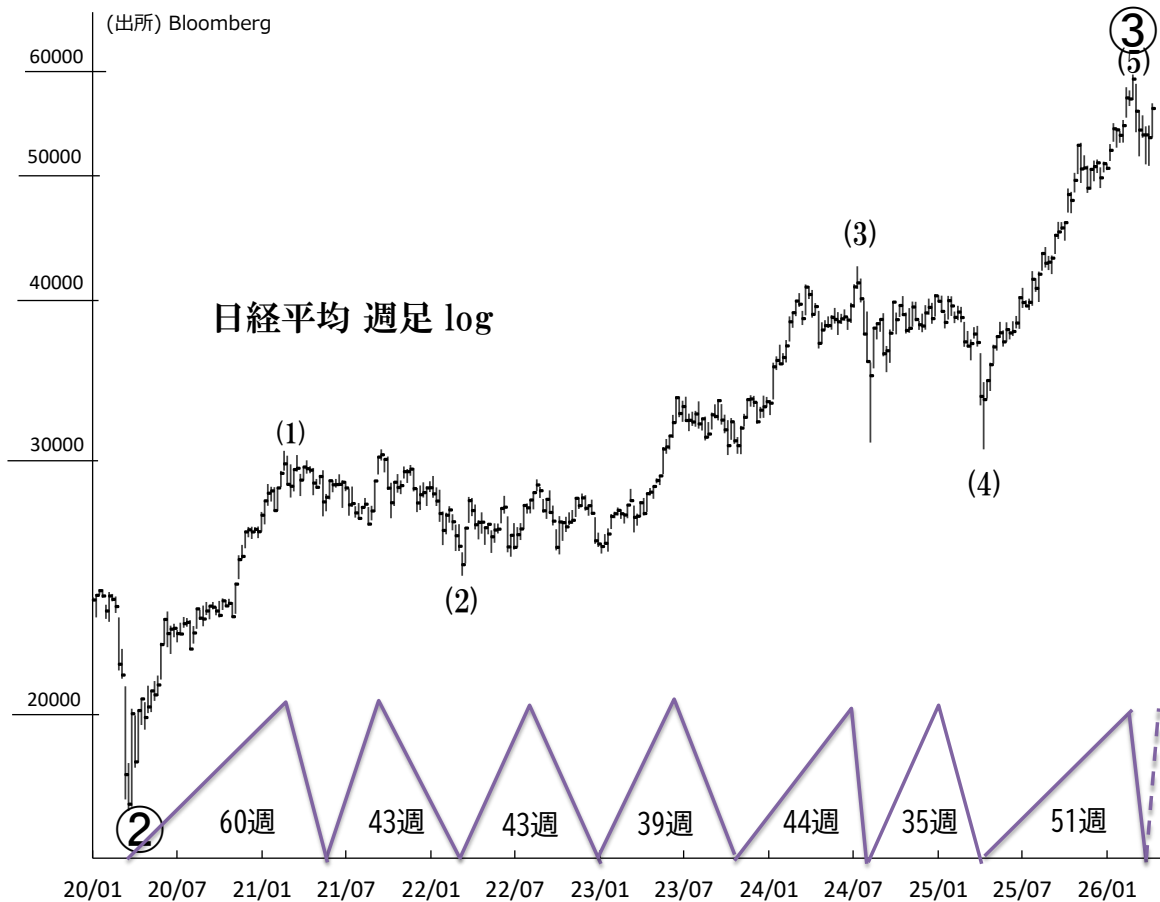
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

2020年3月安値・16,358円以来のプライマリー第③波・強気相場は終了し、プライマリー第④波の弱気相場が始まったとみられます。それはコロナ禍以降で最大のリスクオフ相場になるでしょう。

週次の安値サイクル(安値～安値)は42週±7週(35週～49週)、下げ率は10%～26%(平均17%)です。25年4月底から3月31日安値(50,558円)までの期間は51週を数え、今年2月高値からの下げ率は14.7%でした。日柄面と下げ率、ともに週次サイクルとしての条件を満たしています。

さらに、ここ2週間の上昇幅は2月からの下落中に一度もなかった大きさです。以上を考慮すると、3月31日安値から既に新サイクルに入った可能性が高いでしょう。

この新サイクルは、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になることが見込まれます。水準的にはサイクル高値が59,332円を上回るのは難しく、最大限でもダブル・トップ形成にとどまるでしょう。

サイクル高値時期は早ければ5月(セル・イン・メイ)、あるいは6月～7月でしょう。その後は年末～来年3月のサイクル安値に向けて、株式相場は下げていくと思われます。



[TOPIX]

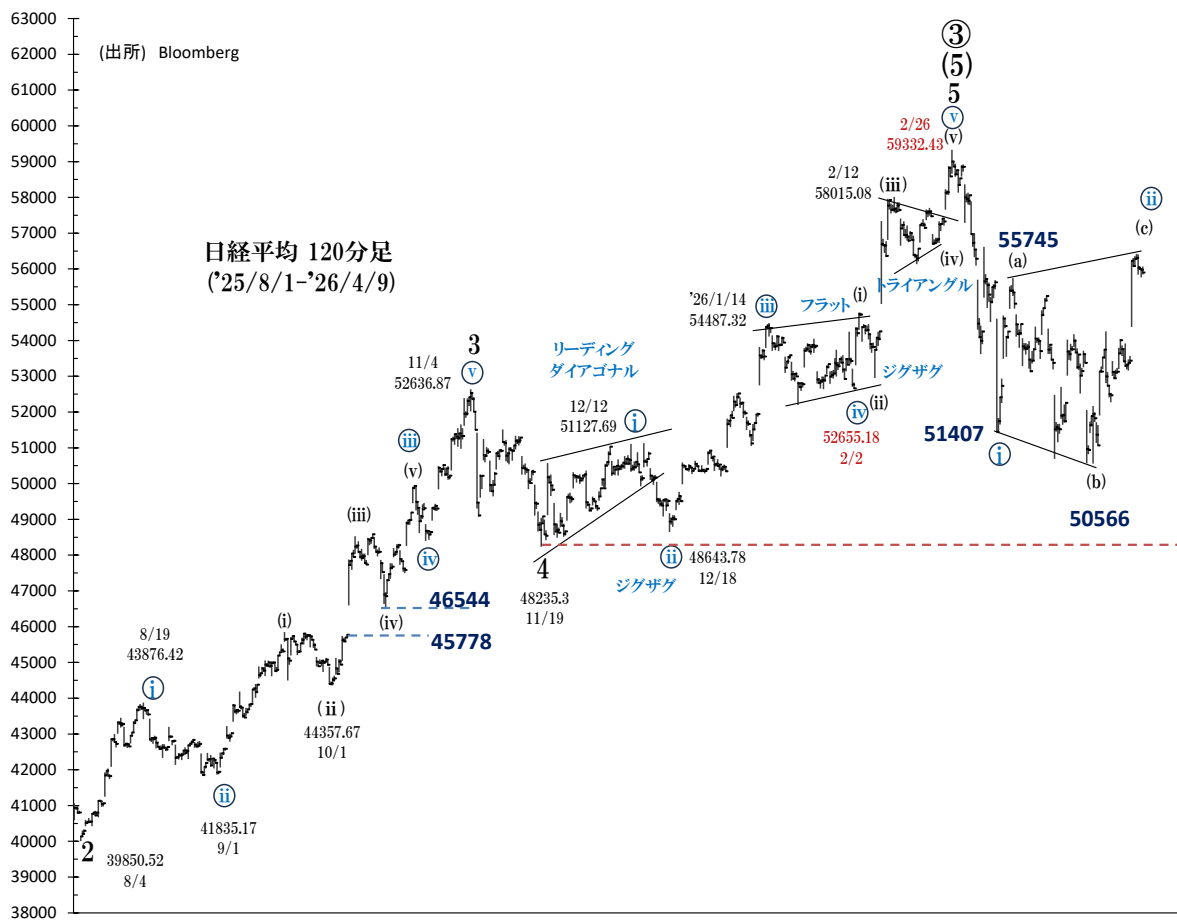
3938(2/27 高値)からプライマリー④波の調整が進行中です。④波の調整規模はプライマリー①波(2018年1月～20年3月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになるでしょう。

3492(3/9 安値)からは、マル ii 波が形成中とみられ、それは「エクспанディッド・フラット」と思われます。3447(3/23 安値)からの(c)波による上昇を以て、マル ii 波は完成します。

マル ii 波は、マル i 波の 78.6%戻り水準[3842]を試す可能性がありますが、必須ではありません。

4月7日終値(3654)を下回ると、マル ii 波終了・マル iii 波開始の最初のトリガーが引かれます。

ひとたび第 iii 波入りとなれば、当面は [3291](昨年4月からの上昇の 38.2%戻り水準)を目指す展開となるでしょう。



[日経平均]

59,332 円(2/26 高値)からプライマリー級第④波の弱気相場が進行中とみています。

51,407 円(3/9 安値)からはマイニュート級のマル ii 波によるリバウンドが進行しており、そのパターンは「エクスパンディッド・フラット」(a)-(b)-(c)とみられます。50,558 円(3/31 安値)からは(c)波の上昇に位置付けられ、既に最終局面にあるようです。イラン戦争の(たった)「2 週間の停戦合意」に安堵した「リリーフ・ラリー」は短命なものに終わるでしょう。

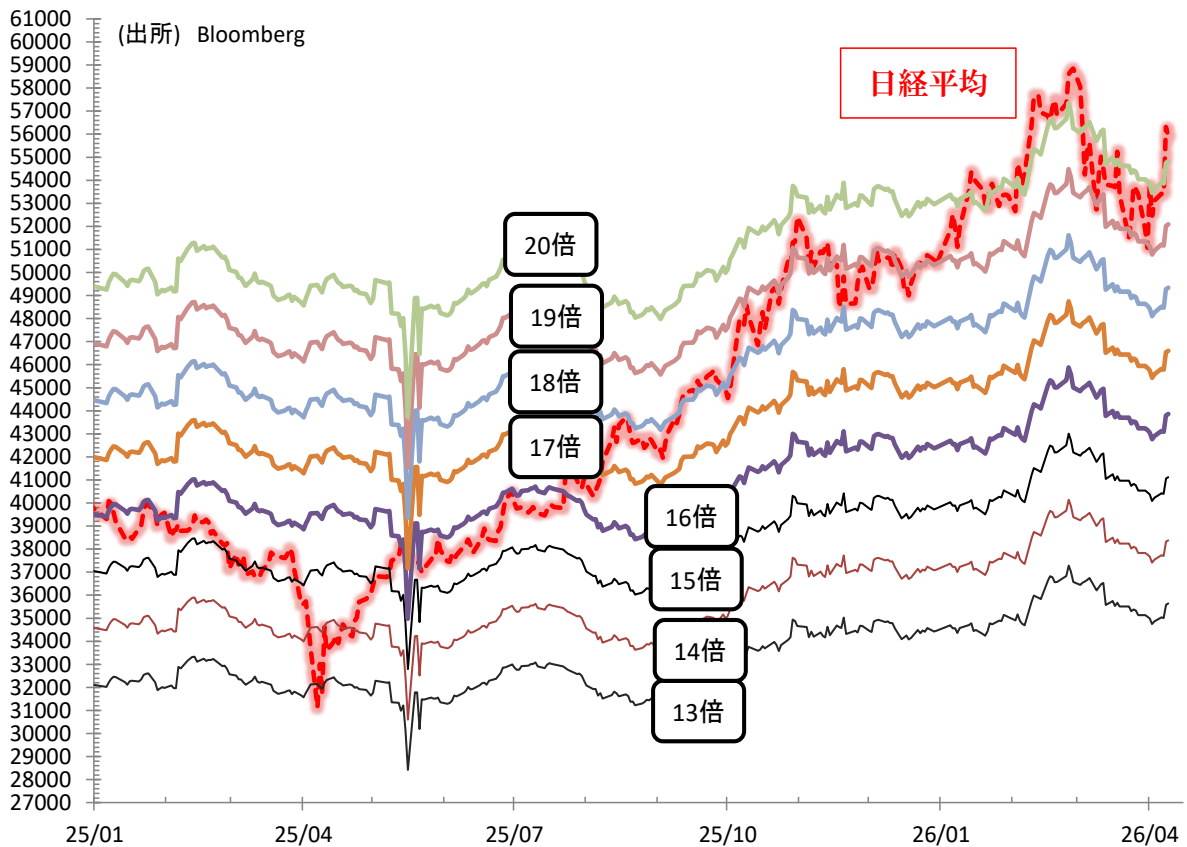
4 月 8 日高値(56,424 円)は、マル i 波の 61.8%戻り[56,305 円]に相当しています。引き続き 66%戻り [56,690 円]、78.6%戻り[57,635 円]などへ上伸する可能性はあります(ただし必須ではありません)。

高水準の買い残が引き続き相場全体の重石となるでしょう。

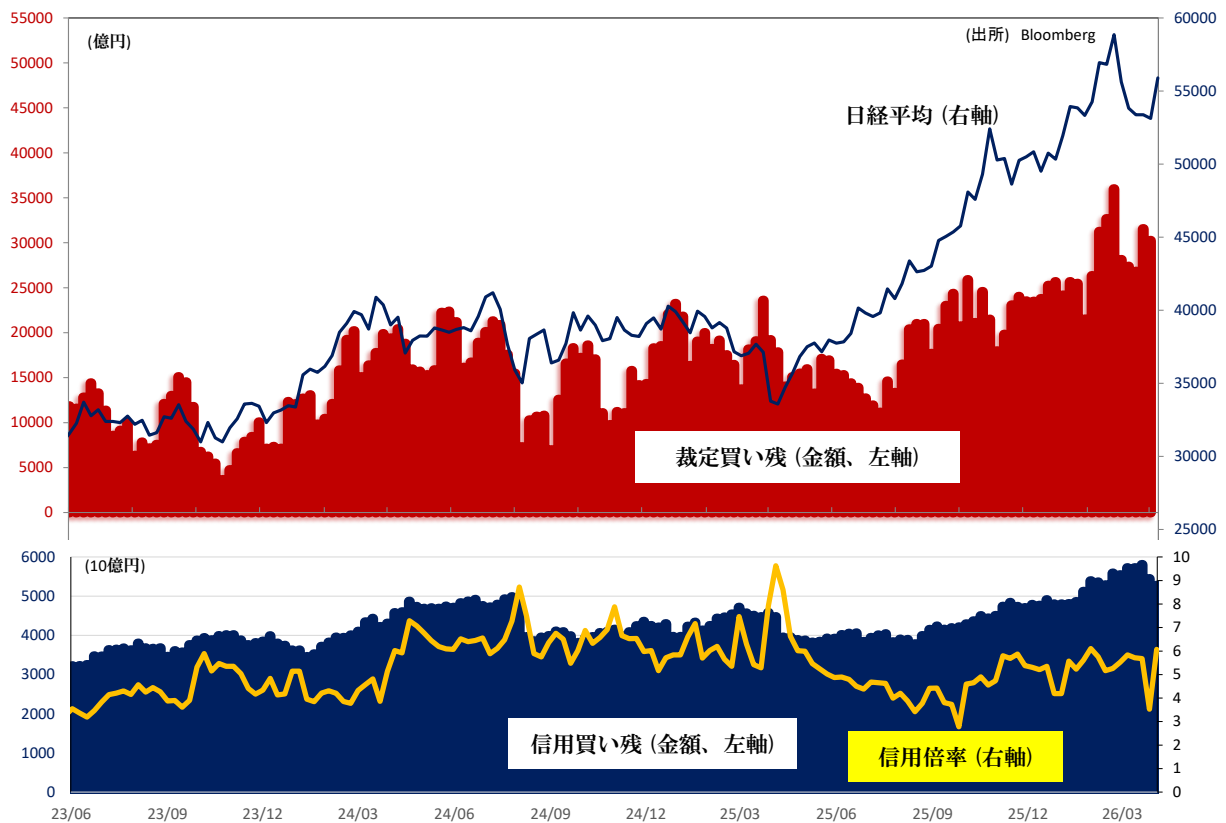
4 月 3 日時点の信用買い残は 5 兆 2704 億円です。20 年ぶり高水準の 5 兆 8025 億円(3/20 時点)から減少したものの、まだ記録的な大きさです。

[予想 PER 別の日経平均水準]

4 月 9 日の日経平均予想 PER は 20.39 倍、予想 EPS は 2741 円。過去最高の EPS は 2867 円(2/25)です。



[裁定買い残と信用買い残] (4月3日時点)



NYダウ・S&P500



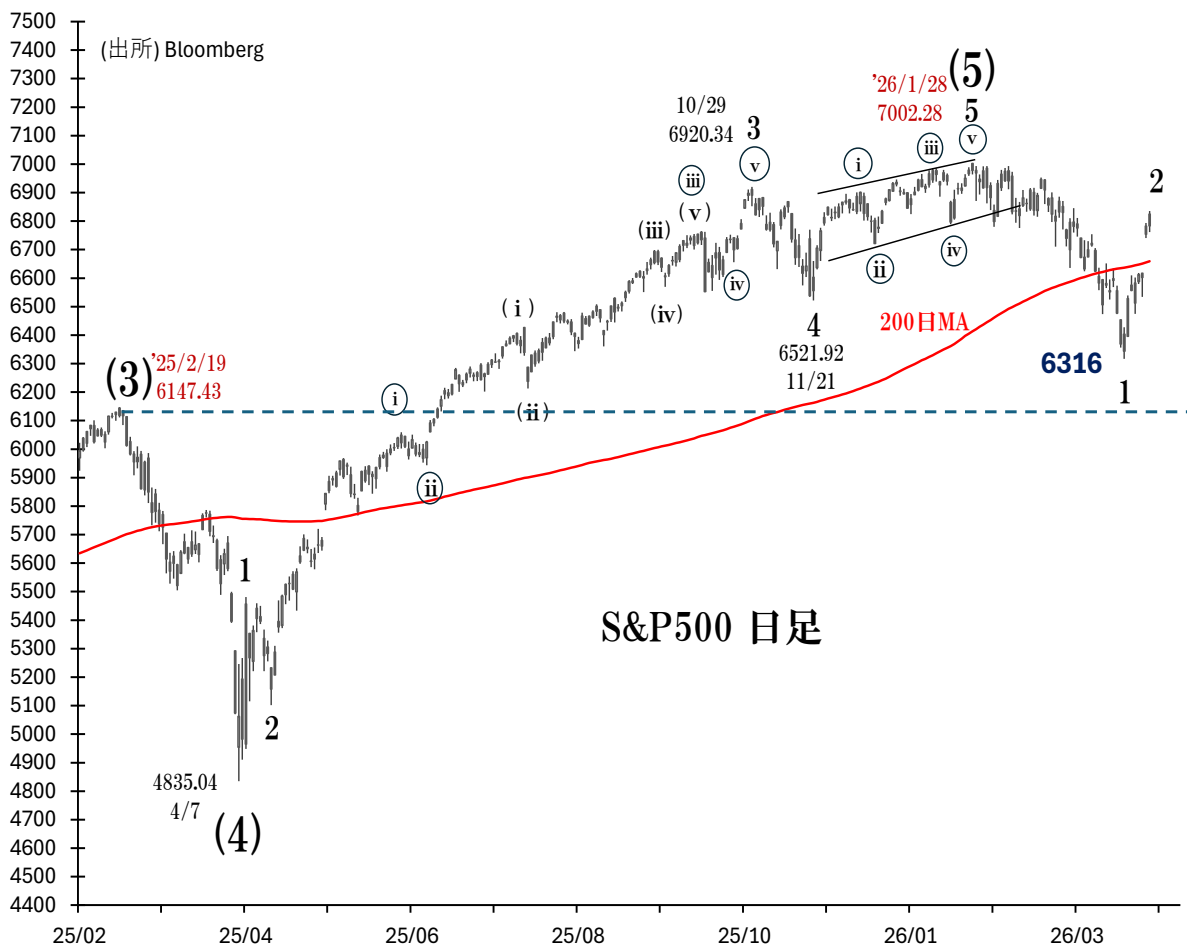
【NYダウ 日足エリオット波動分析】

2月10日に付けた最高値・50,512ドルは、S&P500(高値は1月28日)、ナスダック(25年10月29日が高値)など主要指数によって確認されていません。この「未確認」は、米国株相場の天井打ちを暗示しています。

45,057ドル(3/30安値)からの上昇は、第2波によるリバウンドとカウントされます。

4月9日は一時48,323ドルまで上昇し、第1波の61.8%戻り[48,428ドル]に近づきました。この水準は、ヘッド・アンド・ショルダーズの左肩高値・48,431ドル(11/12高値)にも近いものです。

第2波を終えると第3波の下落に移ります。この見方は、46,803ドルを割れることにより現実味を帯びるでしょう。第3波は45,057ドルを大きく下抜き、昨年8月12日-13日のマド[44,497-44,571ドル]、同6月26日-27日のマド[43,430-43,505ドル]などを早々に試すでしょう。後者のマドの少し上に、フィボナッチ・サポート[43,562ドル](昨年4月からの上昇の半値押し水準)が控えます。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

6316(3/30 安値)からの上昇は、第 2 波によるリバウンドとカウントされます。

4 月 9 日には一時 6835 まで上昇しました。早くも第 1 波の 76.4%戻り[6840]水準に近づいており、ここからの上値は重くなる可能性が高いでしょう。

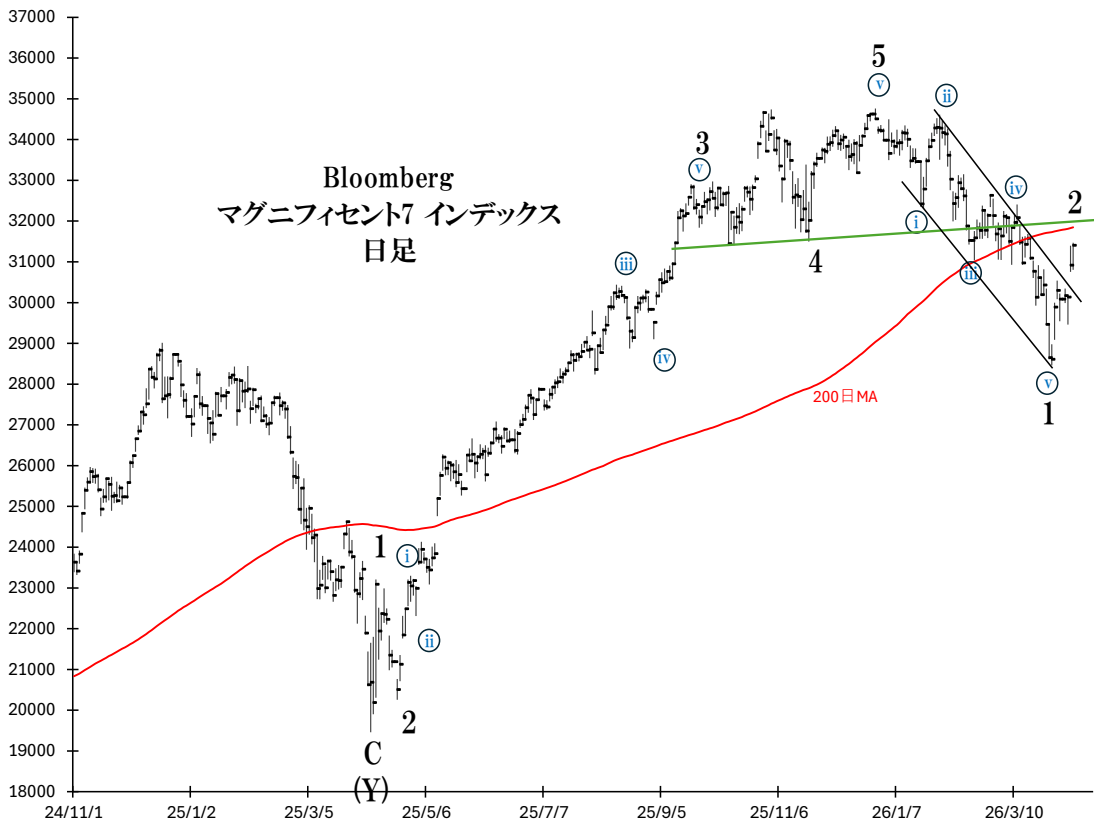
1928 年以降で 4 月は、S&P500 指数が 1 年で最も強い(上昇確率 65%超、平均上昇率約 1.3%)月となっています。この点からすると、今月は上げ渋りながらも(今月はこれまで既に 4.5%上昇しています)下値は堅い展開かもしれません。

一方 6609 を割れると、第 2 波終了および第 3 波による下落開始の、最初の手がかりになるでしょう。

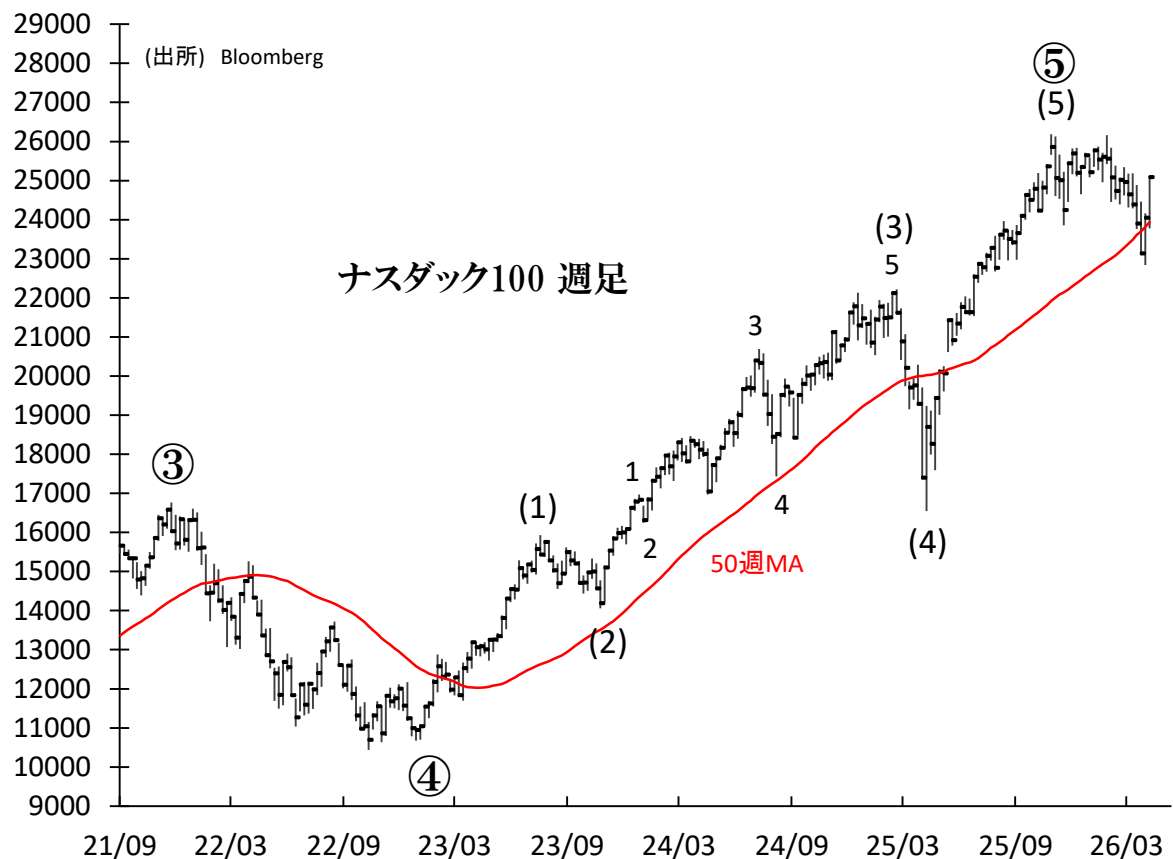
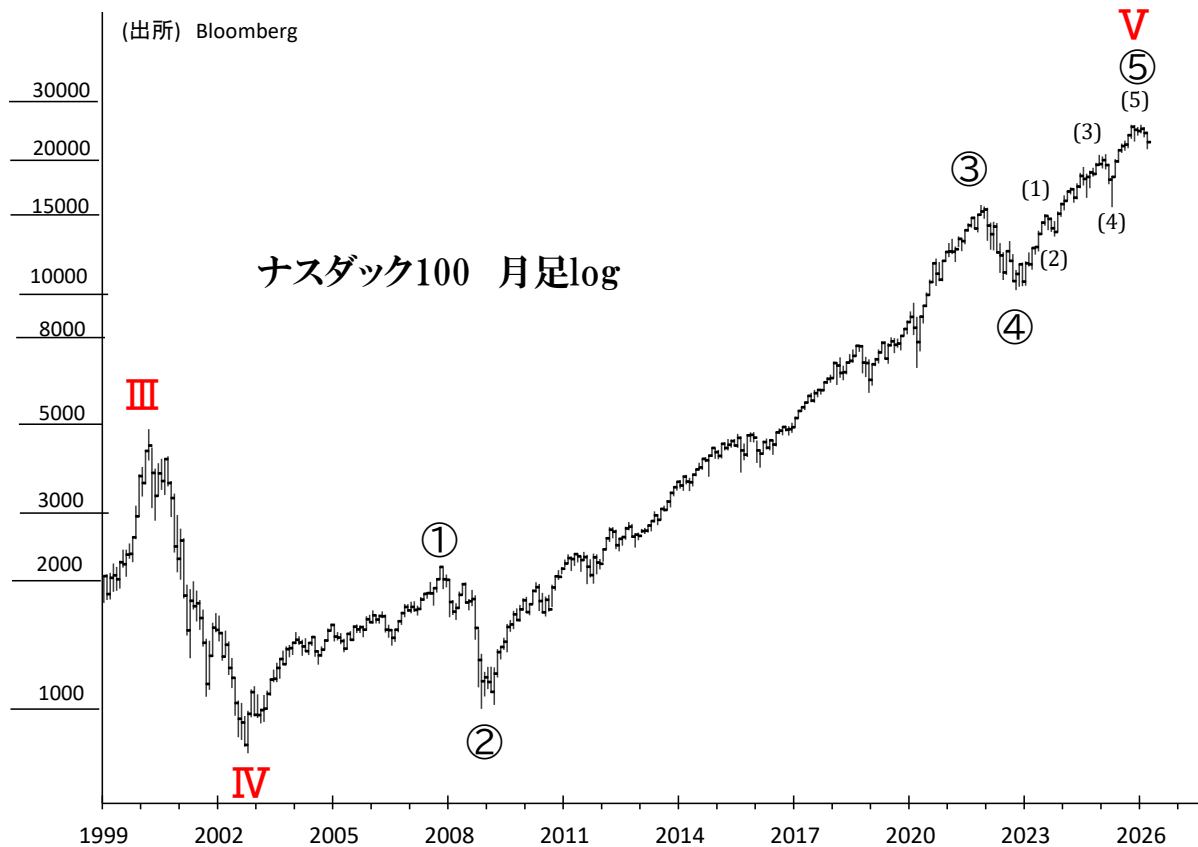
[ダウ輸送株平均] 25年安値からのインパルス波は完成間近



[マグニフィセント7] 第2波リバウンドを経て第3波下落へ?!

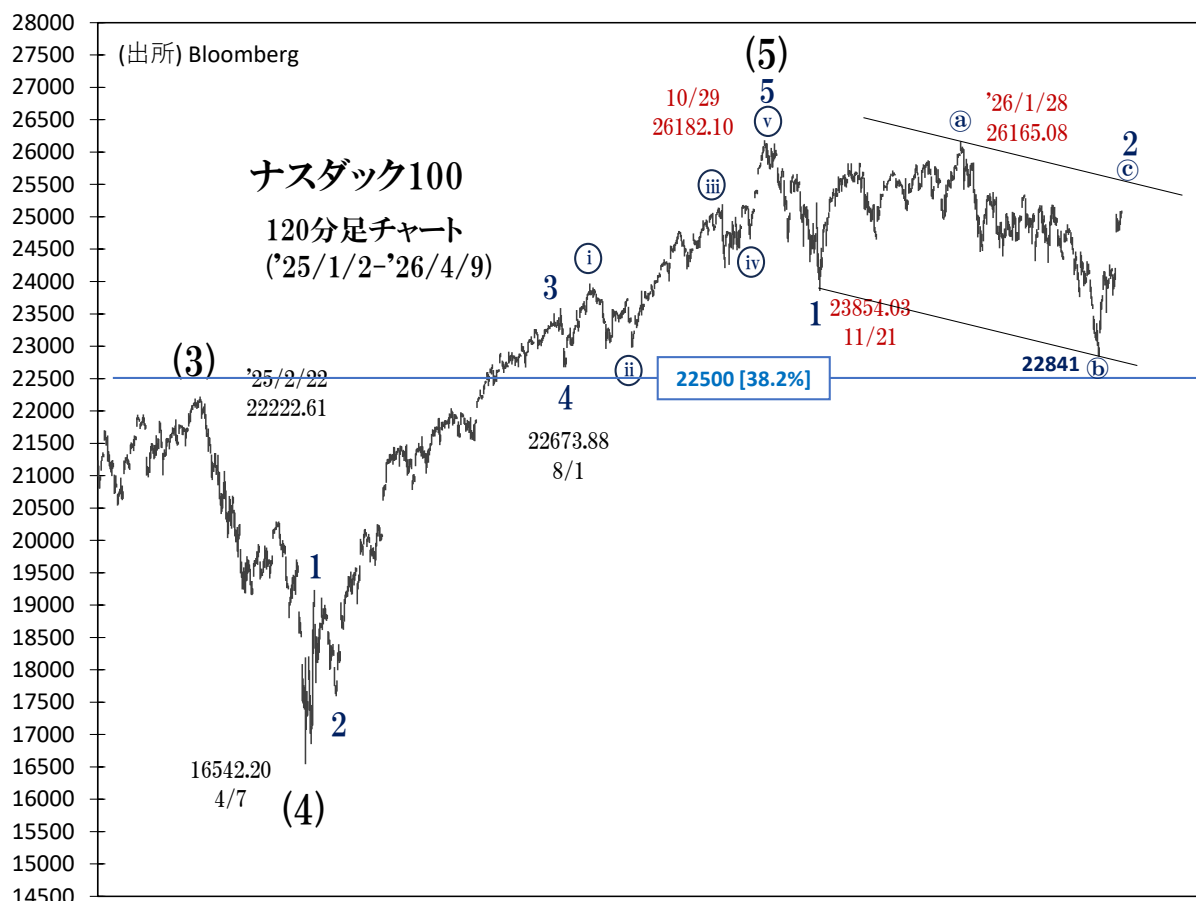


ナスダック 100



【ナスダック 100 月足・週足 エリオット波動分析】

2002年10月底から進行してきたサイクル級の上昇トレンドは、その全行程を26,182(10/29 高値)で完了した可能性が高い、とみています。足元では50週MAを上抜きましたが、過去を振り返ると、株価の大幅下落は50週MA割れの直後よりも、いったん同MAを回復した後に起きています。



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

従来カウントを以下のように見直します。

昨年10月高値(26,182)からの下降第1波は23,854(11/21 安値)で終わり、そこから現在まで、第2波のリバウンドが継続中です。

第2波は「ランニング・フラット」(a-b-c)になるでしょう。この見方通りなら、22,841(3/30 安値)からの上昇c波は26,165(1/28 高値)に届くことはありません。

なおa波とc波が等しく上がる水準[25,152]は注目すべき節目です。4月9日は一時25,097まで上昇、節目に接近しています。

第2波-c波は最終局面にあり、遠からず第3波の下げに入ると考えられます(セル・イン・メイ?)。この第3波は、22,841を大きく下回るダイナミックな下降波です。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

16年半サイクルによれば、米ドル/円(ドル/円)は2028年4月頃まで「円高の時間帯」が続きます。この時間帯においてドル/円の上値は抑えられるでしょう。筆者は28年4月頃までのどこかの時点で、1ドル=125円~120円へのドル安・円高になる可能性をみています。

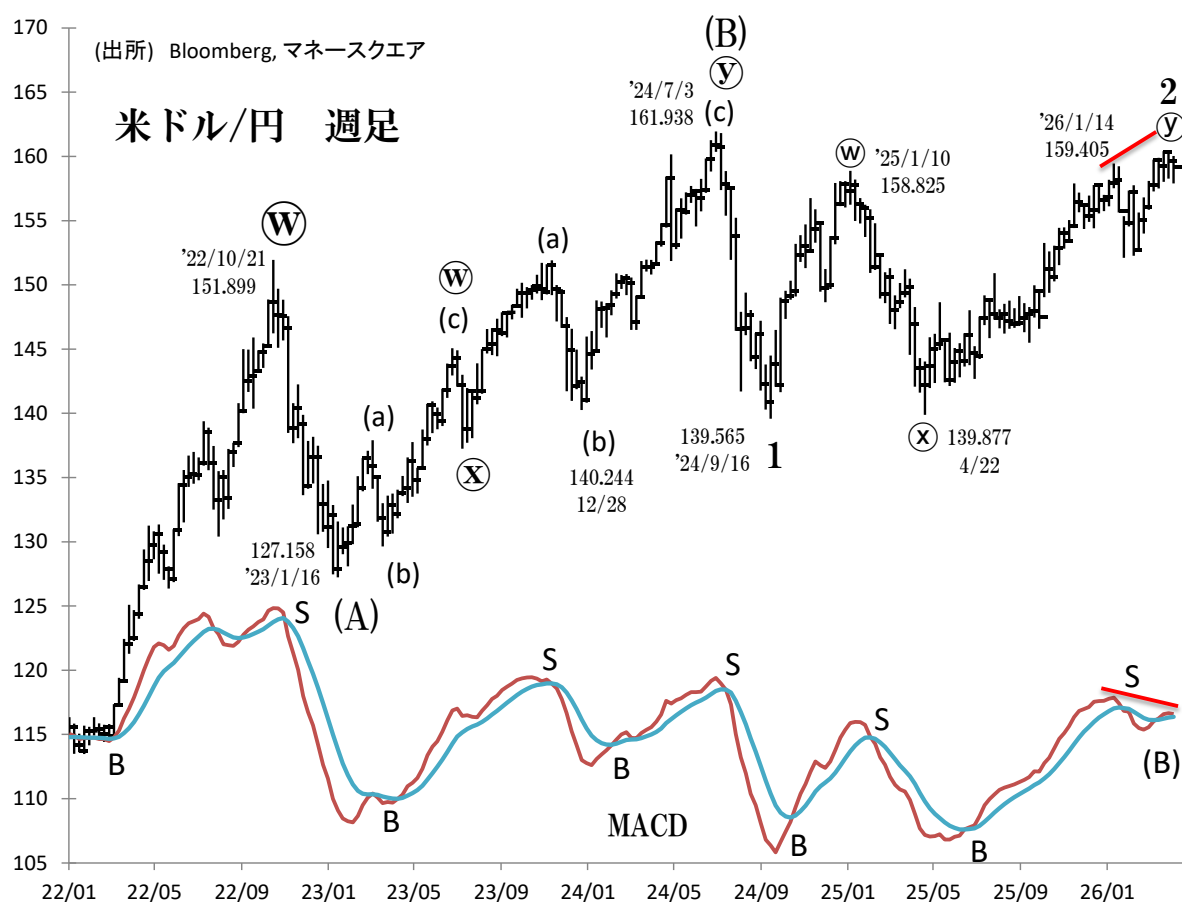
日米実質金利差から導かれるドル/円の水準は、現在1ドル=139円程度です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準よりも極端な過小評価が続いています。

さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方で、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。実際のところ、円安バブル崩壊は足元から始まるかもしれません。

「失われた20年≒金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は40兆円程度とされます。

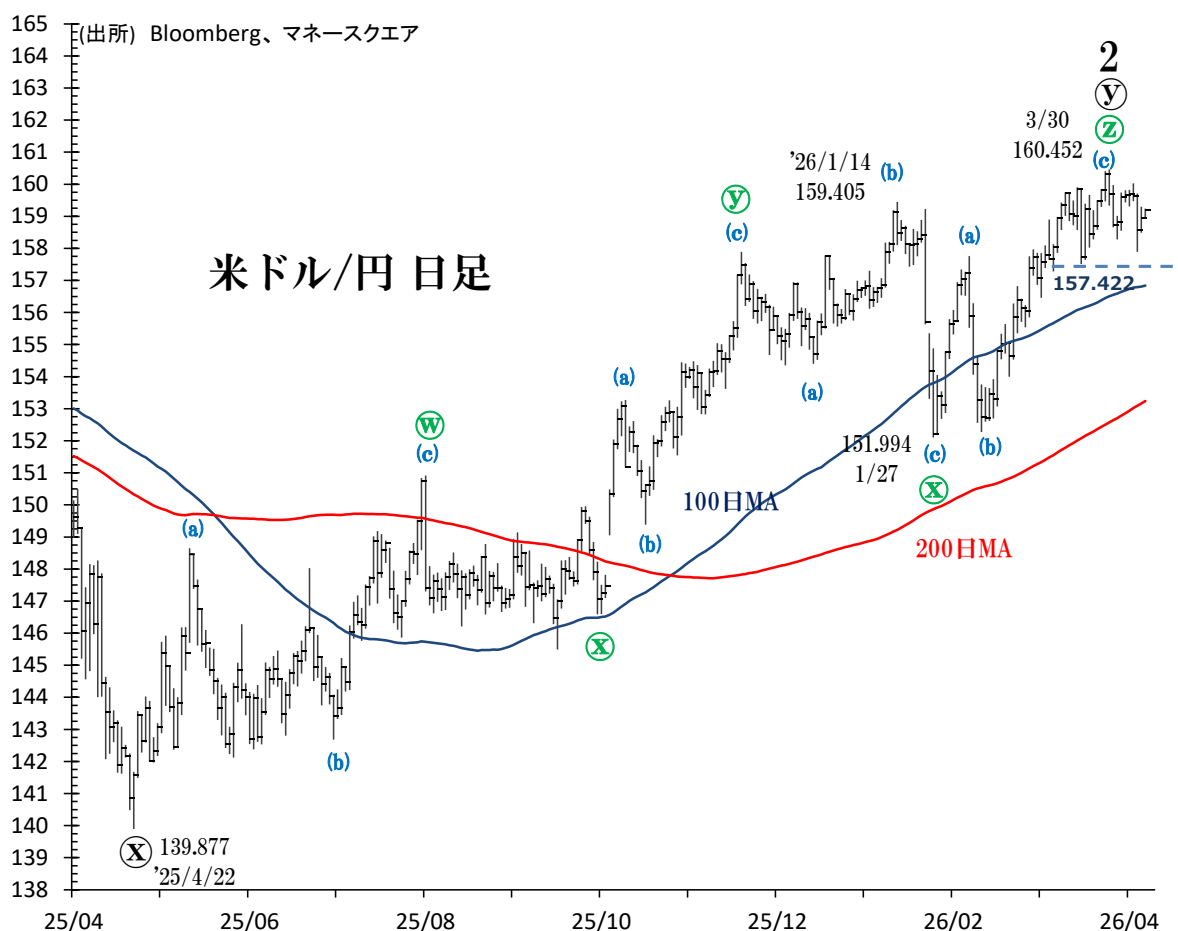


【週足 エリオット波動分析】

3月末には1年8カ月ぶりに1ドル=160円を付けました。しかし24年9月安値(139.565円)からの第2波リバウンドは終わりつつあり、第3波によるドル安・円高開始は近い、とみています。

週次MACDは、1月最終週に半年ぶり売りシグナル(S)を点灯させましたが、足元ではMACD線がシグナル線を上抜きました。もっとも、ここでの買いシグナルは「ダマシ」になる公算が大きいとみています。加えてこの2カ月間は、ドル/円の上値が切り上がる一方、MACDはそうなっていません。この弱気ダイバージェンスは、ドル/円の(大きな)下落が接近していることの示唆かもしれません。

いまは(介入警戒感の他に)円を積極的に買う材料が見当たらず、円高のリスクはほとんど無視されるか、控えめにいっても軽視されています。このような市場の慢心と油断は、史上最大の「円安バブル」崩壊前夜にふさわしいでしょう。



【日足 エリオット波動分析】

25年4月からのドル高・円安は(W)-(X)-(Y)-(X)-(Z)「トリプル・ジグザグ」とみられます。

そのうち、151.994円(1/27)からを3番目のジグザグ=(Z)波とカウントできます。(Z)波のトップは、24年7月の161.938円と「ダブル・トップ」を形成するでしょう。

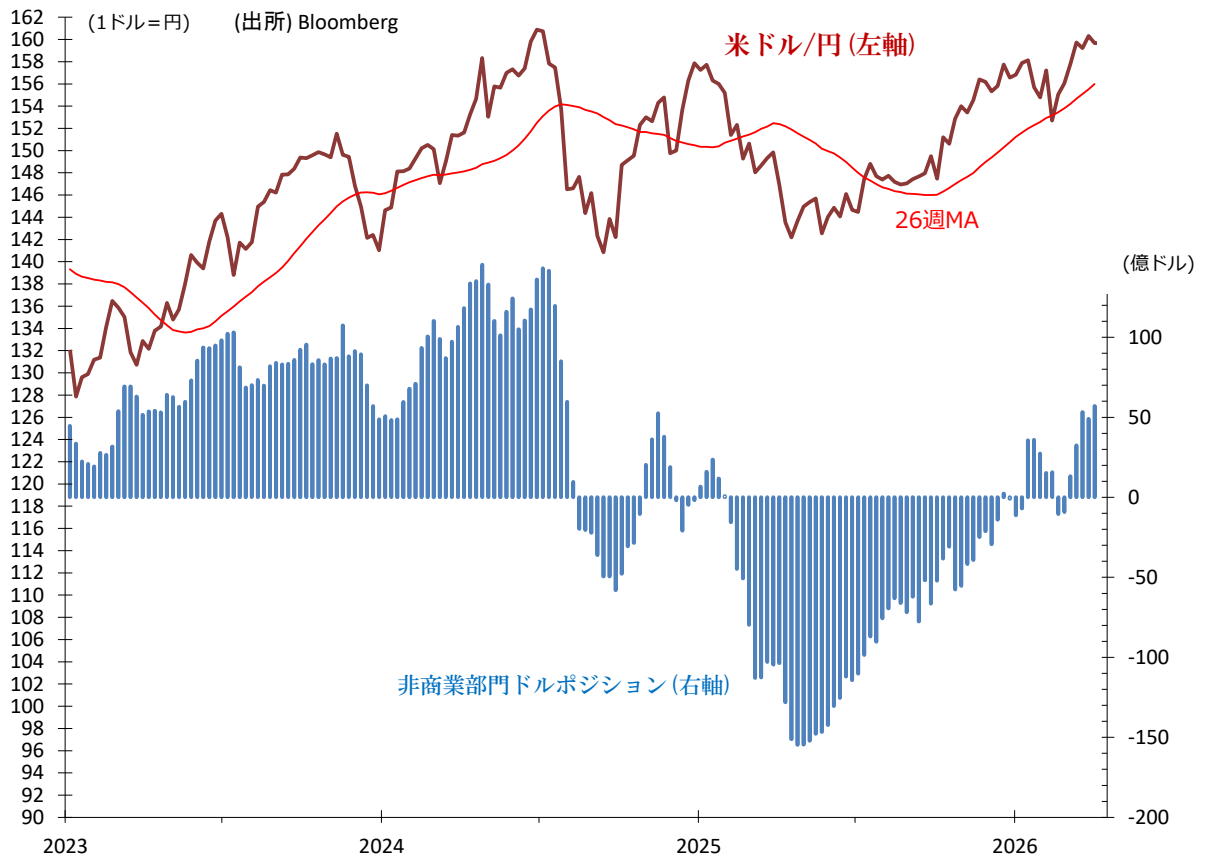
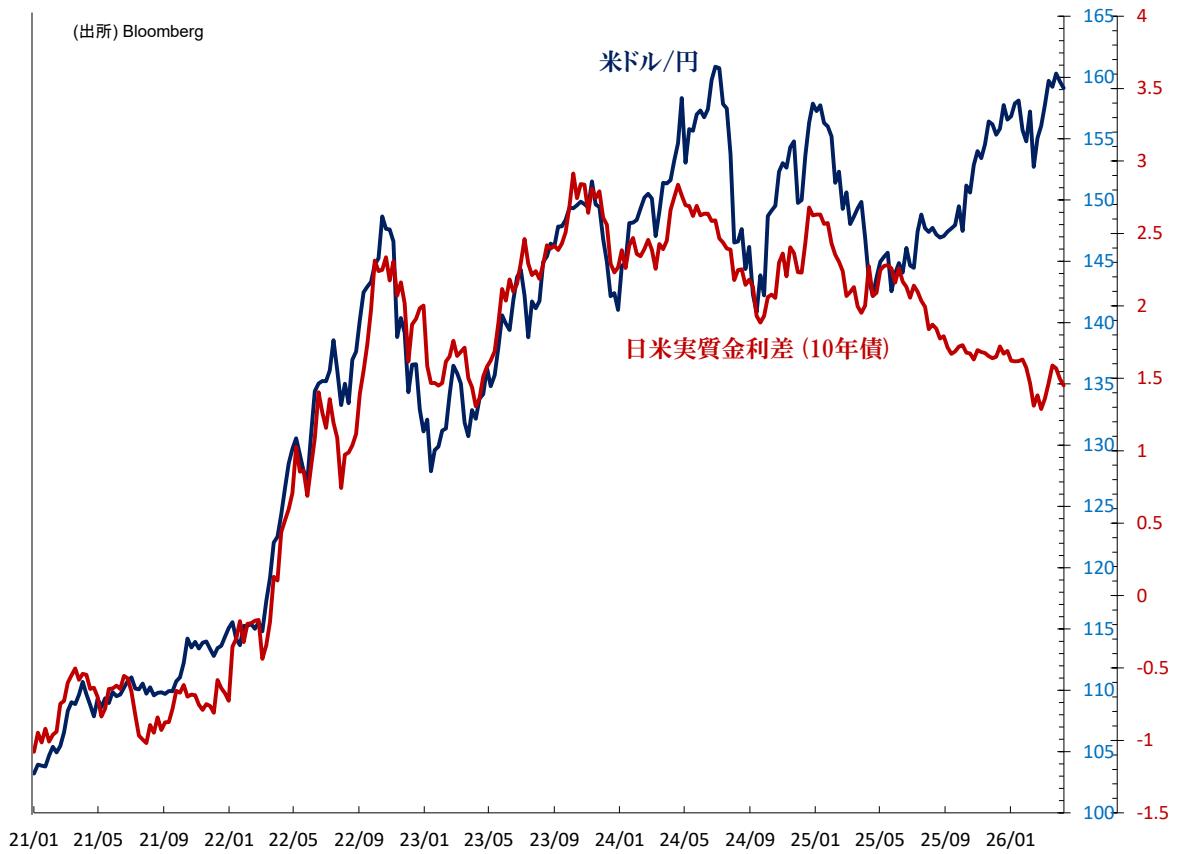
157.442円(3/19)を下回ると、約1年続いたドル高・円安終了の第1シグナルが点灯します。

金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[138.868円]です。

投機筋の円売り持ちは拡大 (2026年3月31日時点)

IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ちは、前週の48.9億ドルから57.4億ドルへ拡大しました。円の売り持ち金額は24年7月以来の大きさです。



ドルインデックス (ドル指数)

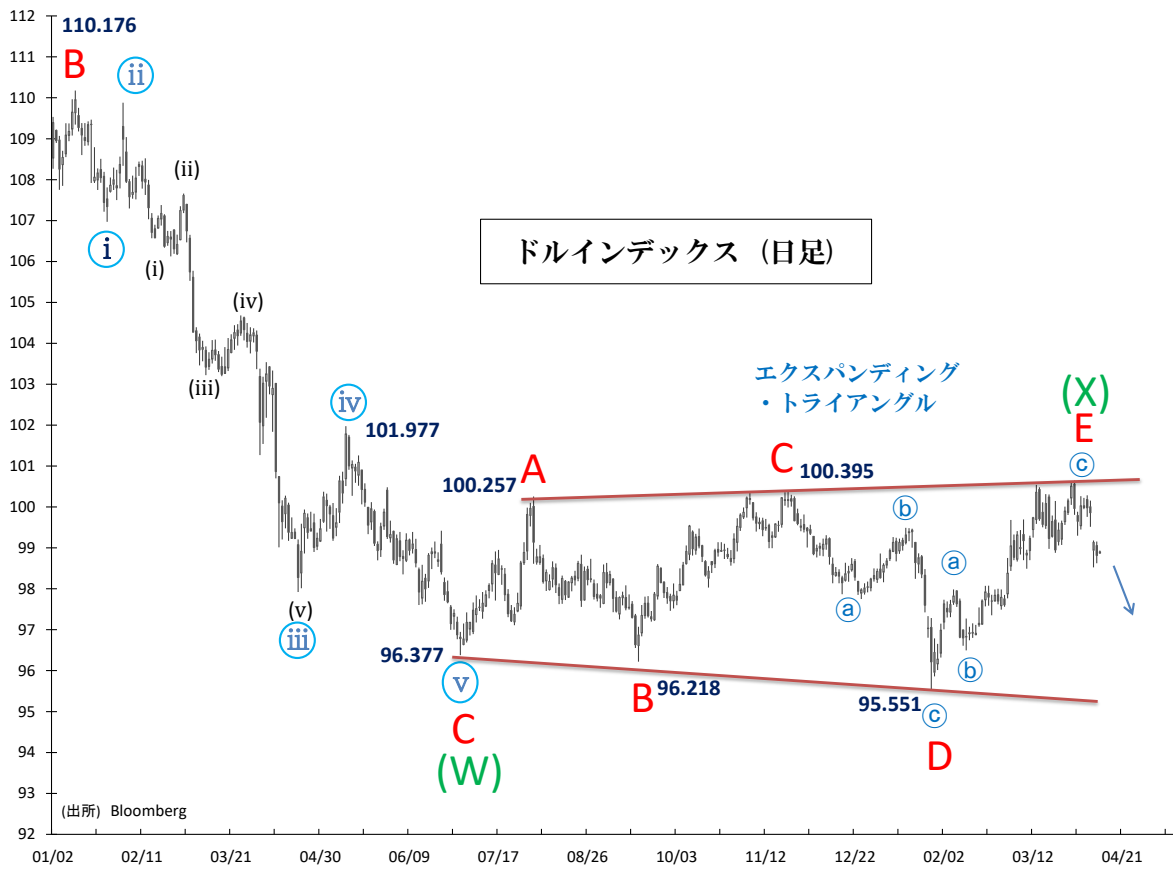


【エリオット波動分析】

25年7月(96.377)からの(X)波は、時間が経つごとに高値と安値が広がる(三角)保ち合い相場=「エクспанディング(拡大)・トライアングル」(A-B-C-D-E)の可能性が高い、とみています。

3月31日に付けた高値(100.643)を以て、(X)波は完了したかもしれません。この見方は、50週MA(98.64)を週末値で下抜くと強化されます。

今後、ドル指数の持続的な下落トレンドが再開すれば、年内にも95.551を明確に下回るドル安が示現するでしょう。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
